
雨のショベル

清水一鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨のシヨベル

【Nコード】

N5522B

【作者名】

清水一鷹

【あらすじ】

その男は元現場監督。犯罪者となりながらも、ゆきずりの作業員をシヨベルカーの事故から救おうとする。が、警察は耳を貸さない。そして惨劇は起こった。

ひとりの男が小雨にぬれて、和菓子の店へはいつて行つた。きれいに磨かれたガラスケースには、柿や柚子、栗などをふんだんに使つた、いろんな種類の甘いお菓子が並べてある。色とりどりにデザインが工夫されていて、見ているだけで口に生唾がたまつてきそう
だ。

かれは、うつろな目で店内をざつと見た。髪がうすい、五十すぎの、ずんぐりした男で、日焼けした四角い顔に、しらがまじりの口髭がのびほうだった。ファッションというにはお粗末すぎる、うす汚れた黒いズボンに、すりきれた古い作業靴。手荷物は、茶色い、くたびれたシヨルダーバッグひとつ。

「いらつしやいませ」

女店員は、いくらか小首をかしげて、注文を待つていた。すると、かれは、いきなりチエックの上着の内側から小型の包丁をとりだし、右手にちらつかせた。そして、かすれぎみのしゃがれ声でいった。

「腹がへつてゐる。酒をくれ」

胸に高橋の名札をつけているその女店員は、すぐに事情をのみこみ、落ち着いて応対した。ワインならございますけど、と適当にこまかしながらレジから二千円札を一枚とりだした。それから近くにあつたまんじゅうを一個、押しやって控えめにたずねた。

「お包みいたしましょうか」

かれは彼女をにらみつけ、ふいに目をあかくした。ごつつい手は小刻みにふるえていた。すばやく二千円札を上着のポケットにおさめ、それから、ちよつとためらつてから、そのまんじゅうをつかんで、あつさりした。

調理場のふたりの女性従業員が目配せしあい、ひとりがそーっと非常用のボタンに近づいた。

うしろで自動ドアがあいた。かれは、ぎくりとして、ふりむいた。だれもいなかった。自分自身の足がセンサーにかかっていただけだった。あわてて包丁をしまった。そうして外へ出ると、足ばやに歩道を北へ向かった。

肌寒い三月なかばの月曜日、午後三時すぎのことだった。

かれはすぐに裏道へはいった。教会のうらに公園があった。パーゴラの屋根に蔭がからんで青葉もおい茂っていた。

そこは小雨でいどならぬれずにすむ場所だった。かれはそのつめたいベンチに腰をおろして、まんじゅうを口へ入れた。わき目もふらず、空腹に耐えかねた、あさましい食べ方だった。

かるくむせたあと、花壇のわきにある蛇口にくちをつけて、水がぶ飲みした。息をとめて、しつように飲んだ。それから、ふうつと大きく息をした。そして胸もとをぬらしたまま、ふらふらとフェンスぞいの路地をぬけて行った。

郊外的大型店の広い駐車場へ出た。すみのほうに数台ばかりの車がとめてあった。ちょうど買い物をするませた中年の女性がひとりやってきた。

彼女はキーでランドクルーザーのドアをあけ、頭をかがめてうしろの席へ一抱えの袋をおろすと、エンジンをかけた。

かれは近づいて、助手席側の窓ガラスをかるくノックした。パワーウィンドーがすーっとおりた。彼女が訊いた。

「なんでしょう」

かれはすばやくドアロックをはずして、助手席へのりこんだ。

「警察を呼びますよ？」

彼女は顔色を変え、おずおずと左脇を見下ろした。

「奥さん、西へ行ってくれる？」

彼女は命じられるままにハンドルをさばいた。市役所のまえを通って、駅前通りの交差点をよこぎった。文化センターの建物が左後ろへと消えて行った。

かれが訊ねた。

「宝くじ、あたったことある？」

彼女は、あいまいに首をふった。

「おれも、ない。今回も、見事にはずれ。おかげで無一文。今夜、泊まるあてもない」

それからかれは二千円札をだして、彼女の太腿のうえに置いた。

「やるよ。乗車賃だ。こんなもんじゃ自販機でカンチューハイも買えやしない」

ダッシュボードのデジタル時計は、午後三時四十分だった。中央自動車道に沿って旧国道を走っていた。前方に工事現場が見えてきた。作業員たちが大地震にそなえて橋脚を補強していた。

そのとき、かれは、しかめっつらで、ささやくような声をだした。「止める。あれを見る」

三十メートルほど前方の右手で、仮設道路ののり面が崩れて、一台のパワーショベルがやや傾きつつあった。そのアームの真下に作業員がひとりいた。その作業員は、何も知らずに作業をしている様子だった。

彼女はいわれるままに車を止めた。いくらか乱暴に急停止したので、男はまえへつんのめり、かるくフロントガラスに額をぶつけた。そのすきに、彼女は運転席から飛び出した。

ちよつとまえから赤い旋回灯がサイドミラーに写っていた。パトカーはすぐに来た。ひゅうと一回うなってランドクルーザーの前へまわりこんだ。

ふたりの制服警官が拳銃に手をかけて、左右から迫った。

「よし。両手をあげて、外へ出る」

かれは命じられるままに、包丁を投げだして、路上へ降り立ち、ボンネットに両手をついた。なんの抵抗もしない。あっけない逮捕劇だった。

警官のひとりが無線機で報告した。

「和菓子店の強盗事件で緊急配備中、工事現場付近の路上で、犯人

と着衣や人相の似た男を発見しました。男はシマイと名のついています。任意同行を求めます」

その間も、かれは首を曲げ、パワーシヨベルのほうをにらみつけていた。そして、ふしぎなことをいった。

「おまわりさん、あのパワーシヨベル、傾いてる。あの下で働いてるひと、危ないよ。いまに倒れて大変なことになる」

警官は聞く耳を持たなかった。ややあつて、男がいったとおり、パワーシヨベルが泥まみれのキャタピラーを跳ねあげて、土砂の斜面に沈んだ。ほとんど同時に、パトカーは方向転換して、工事現場をあとに走りさっていた。

警察署の取り調べ室は暖房がよくきいていた。そこで、かれは、あつさり強盗容疑を認めた。そうして、しきりに工事現場のことを知りたがった。

「あの作業員、どうなりました？」

「作業員？」

ふたりの署員は、ちらつと顔を見あわせた。

「あのとき、おれには、わかったんですよ」

と、かれはうつむき加減にいった。かれは自分のことより、パワーシヨベルの事故にこだわっていた。

「パワーシヨベルの傾きも、作業員の位置も、あのときとそっくりでした。大声で、逃げろと一声、叫ぶべきでした。職務怠慢ともしられてもしかたがない。そうやって、おれは同僚を殺しちまったんだ。あのときと、なにもかも同じ光景でした」

「シヨベルカーの事故のことか？」

と窓ぎわの署員が訊ねた。

「あんた、現場監督なの」

かれはあいまいにうなずいて、顔をしかめた。

「ちよつとまえまで……」

「そうか」

「で、あの作業員、どうなりました？」

「病院へ運ばれたよ」

「肺挫傷？」

「よく知ってるな」

「あのシヨベルの尖端で背中をえぐられたんだね」

「首の骨もやられたらしい」

一同、ひとりずつ軽くうなずいた。

「あのときと、おんなじだ」

かれは、ちからなく苦笑した。

「シマイさんの知り合いだったの？」

と、もうひとりの署員が興味深げに訊ねた。

「いいえ」

「だったら、なんでそうこだわる」

「べつに」

「逃げる機会がいくらでもあったのに、あの工事現場を気にしていたそうだな」

かれは憮然と押し黙った。しばらくそうして何か考えていた。やがて、もどかしげに手をふるわせながら答えた。

「パワーシヨベルが不自然に傾いてたからですよ。それを、おまわりさんに教えてやったのに、無視されました。避けられた事故ですよ」

その署員は、これを聞いて、きつぱりといった。

「警察官には事故を未然に防ぐ義務はない」

「せっかく教えてやったのに」

「そんな予知能力があるんなら占い師でもやったらどうだ？」

「腹がへって、酒をのみたかった」

「だったら酒屋へ押し入りやいいのに」

「こともあろうに、警察のかたが強盗をおすすめになるんですか」

「男手のない店をねらったんだろ」

そんな問答のうちに、取り調べはおわった。

「しゃんとすれば、いい男なのに、アル中なのか」

「飲まずにいられないんですよ。同僚を殺しちゃったもんで……定年まじかで、寮に住み込みで働いておられた、とてもいい人でした」

「事故は、しょうがないだろ」

「おれにはもう現場監督の資格はありません。パワーシヨベルは、もうこりこりだ。見るだけで気持ち悪くなる。あのうなり、あの怪力、あの重量、考えるだけで、おそろしくなる……」

「よし、からだに異常がなければ、二、三日泊まっていってもらう」

かれは二人の署員につきそわれて、廊下をあるいて行った。気ぜわしい靴の響きのうちにも、みじかいやりとりがあった。

「あのおまわりさんがあの作業員を見殺しにしたようなもんですよ」

「不服があるなら、弁護士をたてて訴訟を起こせばいい。堂々と裁判でやりあおう」

「パワーシヨベルが危ないって、おれが教えてやったのに、あの二人は何もしなかった」

「かれらは職務を忠実に果たしてる」

「どうですかね」

「強盗のくせに、なまいきだぞ」

鉄格子のドアに錠をかけた署員が、とうとう怒鳴りつけた。

「ここで頭を冷やして、よく反省しろ」

翌朝、かれは留置場のなかで、首の骨を折って死んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5522b/>

雨のショベル

2010年10月8日15時03分発行